

# ボランティアの 市民活動の 歴史をみる視点

瀧澤利行

茨城大学教育学部教授

イタリアの歴史学者B・クローチエ<sup>1</sup>は、「すべての歴史は現代史である」という象徴的な記述を残している。また、英国の外交官で歴史学者であったE・H・カー<sup>2</sup>は「歴史とは現在と過去の絶えざる対話(An unending dialogue between

the present and the past)である」という有名な言を名著『歴史とは何か』で示している。私たちは、よきにつけ悪しきにつけ、予期せぬ事態に遭遇すると「以前はどうであったか」をほとんど無意識的に顧みる。経験に支えられながら学習して生きる動物である人間にとって歴史的思考は、実はほとんど本能的な行為であるといってもよい。それは時に「反省」という社会的行為を生むし、場合によっては先例主義の言い訳となる。

人が何らかの意思をもって行動し、その行動が社会にとって一定の意味をもつとき（それは必ずしも人間によって価値あることばかりではなく、往々にしてよくないこともあるが）、それは社会の中で何らかの形で記録されずに済まされることはない。その行為の当事者は何ら意識しなかったとしても、その行為が他の誰かの心を動かすものであった時、それは誰かに言わずにはおれないものであるし、それが人に与える影響が大きければ大きいほど人の口に伝えられ、また文字になって残される。あるいはその当事者が後世に備えて書き残しておくこともあるだろう。

人間の社会的行為としてのボランティアや市民活動もまた、人間の創造的な行為として社会に何らかの意義をもっているならば、量や質の差はさまざまであったとしても、その動きはいかなる形

でか必ず記録されているはずである。とりわけ特定の活動を始めた先駆者の実績は記録に残りやすい。問題は、そうした行為の軌跡を誰が、いつどのような姿で残しているか、またその残された姿が果たして真実の姿であるかである。

「歴史はいつでも敗者に背を向けて、勝者を正しいとするものだということを忘れてはならない」といったのは、オーストリアの小説家・評論家のシュテファン・ツヴァイク<sup>3</sup>である。いわゆる正史といわれるものは、確かに権力者の影響によってお抱え歴史家が著述したものであり、それは時の権力者を称賛し、それとのかかわりで敗者には厳しい評価が下されていることはよく知られている。また歪曲しないまでも、権力者に都合の悪いことを表に出さぬようにするため、極力、いわゆる事実の機械的な記載に終始したためにダイナミックな歴史の動静の解釈にはほとんど役立たない記録もある。

ボランティアや市民活動が優れて創造的な行為であることはいうまでもない。そしてそれを開拓した人たちがとりわけ情熱と行動力に溢れ、周囲の人々に大きな影響を与えたことも多くの場合、事実である。そうした状況が、時にそれら先駆者たちの行為を等身大以上のものとして描いたことのないとはいえない。専門的な歴史叙述の訓練を

受けているはずの歴史家でさえ、権力者におもねった歴史の叙述や解釈を行った例は枚挙にいとまがないほどであるから、先駆者たちに影響を受けた周囲の同志たちがそうした先駆者たちの行為を等身大以上に描くことがあったとしてもそれをもってただちに責めるのはいささか酷であろう。

とはいえ、歴史が現在と過去の対話である以上、そうした過去のある時点におけるある種の虚像や見解は、現在の地点からみたときにそれを見直す視点も持ち合わせておく必要がある。先駆者たちから世代を隔てた現代に生きる活動の従事者やその同志によって等身大の先駆者の描き直しがあったとしても、それをもって先駆者の成し遂げた業績をおとしめることにはならないし、むしろ聖域化され、偶像化されることにこそ先駆者への冒とくをはらんでいる。

ボランティア・市民活動のさまざまな先駆は、いわれるところの主体性、社会性、無償性、先駆性の4原則に合致するものであるから、しばしばその意義はより強く語られ、より広く伝わる。しかしながら、ボランティア活動や市民活動が真に多くの人々の生活のただ中から生成し、その人々の生活に即して変容するものであるならば、その活動のありようは常に自己運動を重ね、その意義はその時々諸条件によって再定義され続けるも